

【論文】

ミッション系高等女学校の制服洋装化

刑部 芳則

目次

はじめに

一 ミッション系セーラー服の起源

二 ミッション系高等女学校におけるセーラー服の普及過程

三 独特なデザインの制服

四 制服の制定が遅れた理由

五 姉妹校の共通性と相違性
おわりに

要旨

大正時代から高等女学校では制服の洋装化が進められた。女学生の洋服着用は、日本の女性の洋装化を考える上で重要な意味がある。セーラー服の起源はどの学校なのか。ミッション系の学校は洋装化の模範的な役割をはたしたのか。全国のセーラー服は統一されたデザインだったのか。本稿では学校の記念誌を使いながら、ミッション系高等女学校の制服洋装化を検討した。

はじめに

大正後期から昭和初期にかけて全国的に高等女学校では洋式の制服が採用された。そのなかでも京都の平安女学院と福岡の福岡女学校（現在の福岡女学院）の制服は、セーラー服を最初に採用したものであるとして注目されてきた。ところが、両校の制服がどのくらい他校に影響を与えたのか、ミッション系の高等女学校は同じデザインのセーラー服に統一されたのかなど、その普及過程については明らかにしていない。

高等女学校で洋式制服を取り入れたことにより、皇族や華族などの女性だけでなく、全国的女子生徒が洋服を着る機会を得たのである。その観点でいうと高等女学校の制服は、日本の女性がいかに洋服を着るようになったかを探る上で軽視すべき素材ではない。ところが、昭和戦前期の高等女学校の制服を取り上げたものは少なく、蓮池義治氏の概説的に変遷を紹介したものと、桑田直子氏による統計的な研究¹⁾くらいである。両研究ではミッション系の高等女

学校の制服を意識しているわけではなく、公立の高等女学校の制服との違いについても言及していない。

ミッション系の学校は、明治三十二年（一八九九）

の高等女学校令よりも前に創設されたところが多い。キリスト教との関係から外国人の宣教師を教師として迎え入れ、常に西洋式の生活様式を取り入れたという印象が持たれがちである。そうした印象とセーラー服をどこよりも早く取り入れたという平安女学院と福岡女学院を重ねて見ると、ミッション系の学校が高等女学校の洋装化を牽引したと思われる模範的立場となったのか検証が必要である。

この問題は昭和戦前期に全国の高等女学校にセーラー服が普及していく過程を考える上で避けられないはずだが、従来の研究史では看過されてきた。なぜ研究が進まなかったかといえ、分析に用いる各学校の記念誌は活字刊本ではあるが、入手が困難で簡単に見ることができないからだろう。校史や社史のような非売品の活字刊本は、限られた場所で閲覧するという意味では未活字の古文書と違いがない。それらを単品ではなく、共通するものを全国レベルで重ね合わせながら分析すると、新たな知見を得ることができるのである。

そのような手法を使った本論の実証分析からは、大正後期から昭和戦前期のミッション系高等女学校がどのような段階で洋式制服を導入したかが明らか

になる。これは服飾史では洋装化の流れを捉える意味があり、教育史では学校と制服の関係性を探る作業である。また当時の昭和モダンニズムと呼ばれる社会史を理解する意味も含まれている。

そこで本論では、ミッション系高等女学校の制服のデザインをはじめ、洋式制服の導入の時期や理由に注目し、それらが全国的に共通しているのかを検討する。まず従来の研究では見落とされてきた名古屋の金城女学校（現在の金城学院）が福岡女学院よりも早くセーラー服を制定しており、同校がセーラー服の起源である可能性を指摘する。この点は平安女学院と福岡女学院とで起源をめぐる論争に対し、一石を投じる意味があると思う。その点を確認した上で、独自のデザインを採用した学校制服をはじめ、東京と横浜の学校、地方都市の学校をそれぞれ比較検討し、最後に姉妹校を持つ学校の制服の共通性と相違性を明らかにする。

一 ミッション系セーラー服の起源

高等女学校は、明治三十二年（一八九九）二月七日の高等女学校令によって設置された中等教育機関である。その下には高等小学校と尋常小学校が置かれており、高等女学校の修業年限は四年、土地の状況により三年とし、入学資格は十二歳以上の高等女学校第二学年修了者と定めていた。明治四十年七月十七日の改正では入学資格を尋常小学校修了の十二

歳以上とし、修業年限を四年か五年とあらためた。⁽³⁾
 この上には高等教育機関として女子専門学校と、女性教員を養成する高等女子師範学校とが存在した。

ミッション系の女学校は、明治初年に開校したところもあり、いずれも私学であった。高等女学校令の公布により、当初は高等女学校に準ずる女学校と位置づけられていたところも、昭和戦前期までにはほとんどが高等女学校として認可されている。そのようなミッション系高等女学校で最初に洋式制服を制定したのは、京都の平安女学院である。大正九年（一九二〇）十一月に制定された制服はセーラーの白衿だが、ワンピース型で上下に分かれていない。⁽⁴⁾

大正七年に「家事科学展覧会」、翌年には「生活改善展覧会」が開催され、婦人服の改良および洋装化が模索された。また体操服としては、東京女子高等師範学校教授の井口あくりがセーラー服とブルマー、二階堂体操塾の二階堂トクヨがジャンパースカートを推奨していた。⁽⁵⁾平安女学院が洋式制服を制定したのは、このような服装改善や生活改善といった社会変化の動きを早く感じ取ったからだろう。

ここに一年遅れて洋式制服を制定したのが福岡女学校である。校長のエリザベス・リーは、生徒がバレーやバスケットをするのに着物では不自由だと感じた。そこで母親を集めて「洋服の制服を作りましょう」と述べたところ、賛成を得られたため、自らが服装調査委員長となって欧米各国の女学校の制

服を調査研究した。大正十年十二月に制定された冬用のセーラー服は太田洋服店に調製を依頼し、服地はロンドンから取り寄せた。四十人の生徒全員の制服が揃ってから着る予定でいたところ、夏が到来したため朝鮮から取り寄せたギンガム地で夏服を作ることにした。さらに靴下はロサンゼルスから取り寄せ、靴はリーのものを見本に作らせたという。⁽⁶⁾

このセーラー服は、上下に分かれたセパレート型で、その後の女子生徒のセーラー服と同じ形をしている。臙脂のベレー帽を被り、冬用のセーラー服には紺地に臙脂のラインと、臙脂のネクタイをつけ、中央胸当てには錨が縫われている。錨は「みもとに錨をおろして安らわん（讃美歌二八〇）」という意味による。⁽⁷⁾近年、セーラー服の起源は平安女学院だとメディアで報じられたが、⁽⁸⁾現在のセーラー服が上下に分かれたセパレート型であることからすると、その起源は福岡女学校というべきである。

ところが、今回ミッション系高等女学校の制服を調査したところ、従来の平安と福岡の両校がセーラー服の起源だという通説を塗り替える発見をした。⁽⁹⁾それが愛知県名古屋市の金城女学校のセーラー服である。同校では大正九年四月の入学生に対し「作れる人は洋服にする様に、型は自由、各自の個性に合ったのを作る様に」と勧めた。翌十年三月の集合写真からは、洋服姿の生徒がかなりいるが、そのほとんどが紺地の衿・胸当て・袖に白線三本のセーラー服

であるのが見て取れる。当時の生徒の証言によれば、同年九月から三年生以下は洋式制服の着用が義務づけられ、病気を理由に和服を着る場合は「和服届」を校長に提出するよう指示されたという。セーラー服になったのは、校主事務取扱ローガンの娘が着ていたのを参考にしたからであった^⑩。

ここで注目すべきは、大正十年九月にセーラー服を制定しており、福岡女学校がセーラー服を制定するのよりも三ヵ月早いことである。次章で述べる横浜のフェリス英和女学校でセーラー服を推奨したのは大正十年十一月であり、それと比べても二ヵ月早い。福岡女学校のセーラー服はフェリス英和女学校よりも遅いのである。金城女学校が「セーラー服を採用していたのは東京・南高輪小学校一校のみだった^⑪」というのも過言ではない。大正十一年の全生徒の体操姿を見ると着物に袴の生徒もいるが、過半数がセーラー服を着ている。上下に分かれるセパレート型であることから、従来の福岡女学校が最初というのは見直す必要がある^⑫。

自校の制服に誇りを持ちたいのは、どの学校も同じである。そうした平安女学院の自負心が福岡女学校よりも先にセーラー服を取り入れたという主張につながったのだろう。これは多くの学校記念誌で県下初の洋式制服と記しているものの、その記述が正しくないと重なる。その意味でいうと福岡女学院の記念誌にある「今日の我国の女学生の制服が

セーラー型になった其の元祖は本校だと思ふとき、いささか誇りを覚ゆる次第である」、「各地のミッションスクールから見本を送ってくれと言つて来て、本校のスタイルを取つて制服を定めた学校が多い^⑬」という記述には注意しなければならない。

もしこの記述が正しいとすれば、全国のミッション系高等女学校の制服は福岡女学校と類似していることになる。はたして、そうなのだろうか。これから、その事実を検証するとともに、ミッション系的高等女学校がどのようにして洋式制服を取り入れていったのかを、まずはセーラー服の普及過程から述べることにする。

二 ミッション系高等女学校におけるセーラー服の普及過程

大正十一年（一九二二）四月に開校した福岡県の西南女学院の第一期生は、「初めて制服を着た時の嬉しさ、これでやっと女学生になれました。紺のスカートに真白なセーラー服でした」と感想を述べている^⑭。また別の第一期生は、「制服が出来た迄は殆んどの人とは和服で通学、私は紫の矢絛にえび茶のはかまをはいて通つていた様に思います。やがて夏の制服が出来た時、生徒数が少ないということもあつて洋服というものを初めて身につける私達に、外国人の先生方が一人一人手をとつて着丈等合せて下さり、ネクタイの結び方迄教えて下さる等行届いたこ

指導に預りました。胸のSWAの英字の校章は他校でみることなく一種の誇りとも思えて胸を張って登校したものでした⁽¹⁶⁾という。

開校当初は制服がなく、当時女子生徒の間で流行していた矢絣の着物に海老茶袴という姿が多かった。それが赤いネクタイに赤線三本のセーラー服に変わると、着用に抵抗するどころか「やっと女学生になれました」⁽¹⁷⁾、「胸を張って登校した」というように好評を得ている。とくに「胸のSWAの英字の校章」は、「一種の誇り」だったという。これは福岡女学校の錨との違いを示していたといえる。

熊本県では大正十年に大江高等女学校（現在の熊本フェリス学院）が洋服着用を奨励し、同十二年に洋服を制服とした。その理由は和裁だと型にはまってしまうが、洋裁なら独自の服を作ることができるという、獨創性を伸ばすことになった。ところが、生徒たちからセーラー服を着たいとの要望が出たため、冬は紺で衿・胸当て・胸に白線二本、夏は白で衿・胸・袖に紺線三本、それぞれネクタイをつけるセーラー服を制定した。一年生に洋装を課し、二年生は自分で制服を縫製できることを目指すなど、五年間ミッションに親しむ教育をおこなった。大正十一年度の卒業生もセーラー服を自前で作ったというが、それでも三分の一の生徒は和服を着ていたため、大正十三年夏休み明けから和服での登校を禁止した⁽¹⁸⁾。

ここからはセーラー服が着たいという女子生徒が

いる一方で、従来の着物に袴姿を変えたくないという過渡期の状況を見ることができるといえる。その模様は横浜のフェリス英和女学校でも同じであった。同校では、大正十年十一月に「女学生標準服」としてセーラー服を推奨したが、生徒で着る者は少なかった。そこでミス・ノードフを中心に教師たちがアメリカや国内の資料を集め、家庭科教師の小山リキや卒業生も加わって制服を検討した。大正十三年六月制定の制服は、冬服は紺サージのセーラー服で衿と袖に臙脂の三本線、ネクタイは臙脂のこはく織りの二重、夏服は白地のセーラー服でブルーグレーのギンガム地の衿と袖に白線三本、ネクタイは黒、スカートは冬と同じであった。この制服は翌十四年六月から全生徒が着用した。当初は生徒の母親が縫製したが、後には横浜元町の洋服店に注文するようになった。制服の代金は三十円であるから、同校に通う生徒は恵まれた生活環境であったことがうかがえる。

東京のミッション系では後述の聖心女子学院に続き、大正十一年九月に頌栄女学校が紺のブレザーにベージュのブラウス、臙脂のネクタイを標準服とした。昭和三年（一九二八）四月には白長袖、紺の衿と袖に白線三本、紺のスカート、黒色長方形のネクタイを結ぶセーラー服へ改正している。当時入学した生徒は、「上級生は自由で、和服にえんじ色の袴髪を長く後方に編んで下げ、その先に結んだりボンが歩くたびにゆさゆさゆれ動く優雅さに下級生の私

達はあこがれたものでした」と回想する。⁽²⁰⁾袴からセーラー服への新旧交代を描写しているが、袴に「あこがれた」というのも、それを着る機会が二度とないと感じたからだろう。しかし、入学生たちがセーラー服に魅力を感じるのに時間はかからなかった。別の生徒も上級生の袴姿は「優雅でした」というが、セーラー服は「なかなかあけぬけしてましたね」との印象を持ち、「制服になって母など大喜びでした。今までは毎朝和服か洋服かといういろいろ気をつかって大変でしたから」と述べている。⁽²¹⁾

愛媛県の松山高等女学校では、大正十二年七月からセーラー服を通学服にしようとの議論が起った。学校側は「漸次洋服に改メタシ。但シ所謂制服ヲ制定セズ」という方針を示したところ、父兄からは学校の方針に賛成が十人、「画一的制服主義」を希望する者が二十六人であった。夏服は白のセーラー服にブルーのギンガムのスカート、冬服は紺のセーラー服、ネクタイと靴下は黒であったが、着物に袴でもよかったため、セーラー服を全員が着るまで八年間かかった。⁽²²⁾ここからは次第に着物に袴よりもセーラー服を選ぶ女子生徒が増えたことがわかる。

このような時代の流れを受けて大正十五年四月に開校した熊本県の九州女学院は「服ハ和洋何レヲ選ブモ自由ナレドモ洋服新調ノ場合ハ型及服地ニ就テハ本校ノ規定ニ従フベキモノトス、但シ履物ハ靴ニ限ル」と、標準服としてセーラー服を指定した。着

物の場合でも靴を義務づけた。靴の価格は六円五十銭であるから、ここでも裕福な女子生徒が通学していたことがわかる。昭和四年一月に同院長のエカードは、「此の学校の制服は大変ぜいたくの様に見られていますが、五ヶ年間は保ちますからそう高くはつかないでしょう」と述べている。⁽²³⁾

五年間、標準服と靴を用いたほうが、着物を交換しながら通学するよりも経済的に負担が少なかったのである。九州女学院の冬用セーラー服は、衿と袖に線がない無地で、「大黒帽」と呼ばれた制帽を被った。夏用の白セーラー服には「ストロー・ハット」に似た帽子を用いたが、四回生からは帽子を被らずネクタイを結ぶセーラー服に改正された。⁽²⁴⁾

制服は華美で贅沢な着物姿をなくすことができた。その過渡期には袴姿に憧れた女子生徒たちも、すぐにセーラー服を受け入れている。女子生徒にとってセーラー服はデザインが美しく魅力があった。もともと外国のキリスト教を信仰する学校を選ぶ家庭にとつて、洋式制服を着せることに抵抗はなかったと思われる。ここで取り上げたミッション系の高等女学校は、服装改善運動の流れのなかで洋式制服を早期に取り入れたといえる。しかし、どの学校でも福岡女学校の影響を受けたというわけではなく、独自の判断でセーラー服を制定していた。

三 独特なデザインの制服

当時の女子生徒たちから圧倒的に人気が高かったのはセーラー服だが、通常のデザインとは違うセーラー服や、セーラー服ではない制服を制定する学校もあった。石川県の北陸女学校は大正十一年（一九二二）に四年制から五年制になったのを機に制服を制定した。前年の秋から教師のミス・チェピン、島倉ふさ、志保直が委員として制服を調査し、運動・衛生・経済の三点に適し、流行に流されないデザインを検討した²⁵。その結果定められた「暗褐色」のセーラー服は、衿や袖などに線のない無地一色のものであった²⁶。これは斬新かつ好評で、金沢市内の小学校でもそれと同じような制服を制定するところも見られた²⁷。

神戸の松蔭高等女学校は大正十四年に制服を制定し、生徒たちは六月から着用した。この制服を最初に着た生徒によれば、「そのころ女学校の制服といえばセーラー服に決まっていたのでございますね。ですから、松蔭の制服はとても特徴がありました。夏は富士絹でございまして、手首まであつて真っ白で、ひだや汚れ目に苦勞しました」という。昭和八年（一九三三）に撮影された写真を見ると、冬服はセーラーではない白衿にベルトをつける紺地長袖であったことがわかる²⁸。兵庫県下の高等女学校でセーラー服姿が散見されるようになると、それとは違った松蔭の制服は目立ったことだろう。この制服は、

教員のミス・ケースが中心となってイギリスの女学校の制服を参考にして決めたという²⁹。

横浜の共立女学校では、大正九年頃から体操服として白のセーラー服に紺のスカートを用いていた。この衿は取り外しが可能で、肘が隠れるほど長かった。冬はセーターを重ねて寒さを防いだ。昭和二年に制定された学校制服の冬服は、大正十二年の関東大震災よりも前から計画していたが、震災の発生によって中止されたものであった。セーラー服の赤い衿は、校長のルーミス、大正十五年度の卒業生、後藤惣兵衛商店が相談して決めた。夏服には体操服として用いていたセーラー服が採用されている³⁰。

この共立女学校のセーラー服は、北陸女学校に影響を与えた。それまで北陸女学校は前述の「暗褐色」のセーラー服であったが、昭和十年に同校が創立五十周年を迎えると、それにともないセーラー服のデザインを変更した。このとき参考にしたのが共立女学校のセーラー服であった。制服のデザインと色合いは北陸地方にはないため「本校の特色になり、市街を歩いていてもよく目立った。生徒はこれを誇りにも感じ、市民たちからも親しまれ今日に及んでいる」と、生徒はもとより地元の人びとからも支持された³¹。紺地のセーラー服に赤のネクタイを結ぶだけなら他校と大差はないが、衿と袖口が赤色で黒線三本というのが特徴である。

東京の普連土女学校は、北陸女学校とは対照的に

セーラー服からブレザーへと変更している。普通女子学校が昭和三年にセーラー服を制服としたのは、秩父宮妃として嫁ぐためアメリカから帰国した松平節子を迎える際に、普通土の生徒を明示するためだった。冬は上下紺、夏は上を白とし、衿と袖に白線三本、ネクタイは黒というセーラー服である。昭和四年の卒業式では五つ紋付なども見られたが、翌五年の卒業式からはセーラー服で統一された。

それが昭和十二年七月に日中戦争が起きると、エスター・ローズの考案にもとづき、物資節約の観点からジャンパースカートに改正し、ベレー帽を被り、冬はボレロを着ることとしている。しかし、一般的にジャンパースカートよりもセーラー服のほうが使用する生地は少なく価格も安いいため、この改正措置が正しかったかは疑問である。いずれにしても、ボレロ型の制服は珍しく、ミッション系特有のデザインという印象を持たれたと思われる。

この前年の昭和十一年に開校した高知県の清和女子学校では、校長の松山高が洋裁の双葉女学院を経営していたため、セーラー服ではない「斬新なデザインの制服」を考案した。白ブラウスに箱髷をとったジャンパースカートであり、冬はその上に「サックコート」を着た。これは純心女学院や後述の福岡女子商業学校と類似しており、セーラー服が主流であった当時、ジャンパースカートの上にボレロ型の「サックコート」を着るスタイルは「斬新なデザイン

の制服」と判断されたのである。⁽³³⁾

全国各地の学校ではセーラー服の数が多いが、それに影響されることなくジャンパースカートにブレザーやボレロ型の上着を着せる学校があったことを見逃してはならない。これらの事例からは、セーラー服の起源となる金城女学校や福岡女学校の制服を参考にしていないことがわかる。

四 制服の制定が遅れた理由

大阪信愛女学院は、大正三年（一九一四）一月二十六日に海老茶袴の裾に白線二本を入れたものを制服として定めた。大正十一年の夏にセーラー服へと改正されたが、これは同年四月にセーラー服を制定した大阪府の普溜女学校に次ぐものであった。当時の生徒から、制帽は「バケツのようだ」と不評だったが、セーラー服は「好きな着物をお母様を買って頂いたよりもっと嬉しく、フランスにでも飛んで行ったような感じがいたします」との好評を得ている。⁽³⁴⁾これだけ見ると、京都、愛知、福岡、石川と同じように、大阪でもミッション系の高等女学校が制服の洋装化の先駆けとなったように思える。

だが、大阪の梅花女学校からはミッション系の高等女学校が積極的ではなかったことがわかる。同校は「関西における女子学習院」といわれるほど、華美な着物を着る生徒が多かった。女子学習院や東京女学館などのお嬢様学校に女子生徒を通学させる家

庭は富裕層が多く、学校側もそれを理解して華美な着物を抑止することをあまりしなかった。⁽³⁵⁾ 梅花女学校でも自由に任せていたが「風紀規律上にも悪影響」があると判断せざるを得なくなり、昭和三年（一九二八）四月に洋式制服を制定した。紺セルで衿と袖に三本の白線をつけたセーラー服で、縹色サテンのネクタイをつけ、紺フェルトの帽子を被った。ちなみに同校の女子専門生はワンピースドレスを採用して高等女学部生との違いを示した。⁽³⁶⁾

ミッション系の高等女学校が複数存在する熊本県下（現にありながら、上林高等女学校（現在の熊本信愛女学院）が洋式制服を制定するのは遅かった。校長の田中清司は日本人には和服が似合うと考え、生徒が洋服を着るのを避けた。なかには黒皮靴に黒靴下を用いる生徒もいたが、他校が洋服姿で通学するようになって、海老茶袴に白足袋姿を保守し続けた。しかし、時勢の変化から、生徒はもとより学校側も着物に袴を時代錯誤と感じるようになったのだらう。昭和四年には大小白線一本を衿と袖に入れたセーラー服の制定に踏み切った。⁽³⁷⁾

同じような事例は長崎の活水女学校でも見られた。校長アンナ・ローラ・ホワイトは、個性が失われ、着たきりがちになって衛生面でもよくないとの理由で制服の制定に反対した。それゆえ、昭和五年に長崎県下の高等女学校で洋式制服が顕著になってからも制定しなかった。だが、時勢の変化に抵抗できず、

昭和十年五月には高等女学部（現にありながら）に限り、セーラー服を制定した。冬服は衿と袖に白線三本と、衿の後ろ左右に星が刺繍された。ネクタイの色は、一年生が赤、二年生が臙脂、三年生が水色、四年生が紺、五年生が黒、儀式用が白と、平常と儀式の違いに加え、学年によって分かれた。⁽³⁸⁾

横浜の捜真女学校が昭和八年にセーラー服を制定したのは、制服がないため華美になる生徒が増えたからである。制服立案の委員にはミス・マリーンの他、日本人の教師五名が当たった。セーラー服のスカートのヒダは三十六枚で、ネクタイは儀式用の白と通常用の紺を使い分けた。イースター礼拝や修了式のときは、ネクタイを間違っつけてくる生徒がいた。⁽³⁹⁾ この制服を最初に着た生徒は「県下で一番スマートなセーラー服で、仕立てもそのころ東京の吉沢といえは有名な店で、そこでつくらせたものでした。校服が決まるまでには、賛否両論で生徒側も結構意見を戦わし、それだけに決まったときの感激は非常なものでございました」と回想する。⁽⁴⁰⁾

神奈川県下で一番「スマート」かどうかはわからないが、彼女がそのように誇りに感じていたことは間違いない。東京の吉沢洋服店で仕立てたことにも優越感を持っていた。なによりも、生徒間で制定前に制服について侃々諤々と意見を交わしたというから、そうしたセーラー服に対する熱い思いがあらわれていたのだらう。

女子学院がセーラー服の制服を着用させたのは、昭和九年の入学生からであった。東京では洋式制服に変わっていたから、この段階で着物に袴姿の女生徒は珍しかったといえる。冬は紺サージで衿と袖に白線三本、ネクタイ通しに「JG」の刺繍と腕章、夏服は白で衿と袖が水色、「JG」の刺繍と腕章を水色とした。特筆すべきは、ネクタイの色が一年生から三年生が赤、四年と五年が黒、式典用が白と色別していることと、ミス・ホルセーなど複数の外国人教師の「黒の靴下はメイドだけが穿くもの」という意見により他校には見られない茶色の靴下を採用した⁽⁴⁾ことである。

他に比べて制服の制定が遅れたのには、校内に「制服否定論者であった個性尊重派」の生徒が少なからずいたからかもしれない。そう考えていた生徒の一人は、「自分の趣味、自分の個性を最も普通に且目立ち易く表現する衣服を、他からきめられてしまふなんて、何て人格を無視した、何て個性を尊重しない、……とばかり勝手な気焰を上げて、制服の可否を問はれた時⁽⁵⁾も、何時も「否」を書いて来ました」と述べている。学校側は制服制定に向けて生徒からアンケートを取っていたことがわかる。その結果、「否」が多かったことが、同校の制服制定を遅らせたと思われる。

だが、その彼女もセーラー服が制定されると、「制服は重宝なものです。第一に今迄の様にさて何を着

ようか、と考へる煩雜さがなくなりました。通学は勿論、教会にも、お買物にも、散歩にも、音楽会にもと大抵これでおし通してしまひます、制服を着て歩く時、ある誇を感じずには居られませんか」と、手のひらを返したように服装観が変わってしまった。

また彼女によれば、それまで青山女学院や女子学院などと間違えられて「大いに自尊を傷つけられて憤慨してしまふ事も度々」だったという。制服に対する高評価につながったのには、そのような誤認がなくなったことと、セーラー服に誇りを持ったことが大きいだろう。なによりも「鮮やかな転向ぶりを見せずにおかない位の魅力を、我が女子学院の制服が持つてゐた」と回顧するように⁽⁶⁾、その制服のデザインが魅力的であった点は見逃せない。

捜真女学校と同じく兵庫県の神戸女学院も服装が派手であったが、洋式制服の導入は極めて遅かった。同校では昭和八年から高等女学部で全員が洋服を着て、髪型もお下げからおかっぱになった。専門部は洋服と和服が半々で、多くはお下げ髪をしていた。

この頃から社会的に「非常時」が流行語として流布すると、父兄の間からは華美な服装を抑止するため制服の制定を望む声⁽⁷⁾が寄せられた。

しかし、女学院は「質素と自由を旨とするので家庭着のまま吞気気軽に登校でき、制服制定は不経済である」と回答した。学校側はとくに華美とも判断しなかったのだが、ある父兄は副学院長に直談判し

て制服制定を求めた。その際には「米国主義」とはいえ、「日本人ノ子女ヲ教養」するからには「日本ノ国風国情乃至国民性」を考慮してほしいと前置きし、「物欲シク人真似ノシタイ盛リデアリ」、「華美ヲ戒メ質素ヲ旨トセヨト申シタコロデオサマルモノデアリマセヌ」、「年頃ノ子女ニ自由ヲ与ヘルホド危イコトハアリマスマイ」と批判する⁽⁴⁵⁾。

この批判点は明治時代の高等女学校で木綿の筒袖を採用するときとも重なるが、適齢期の女子生徒は周囲の流行に敏感で、友達が華美な着物を着ていれば、同じように着飾りたいと思うものである。したがって、自由に任せていては華美を抑えて質素になるわけがないという。これを受けてもすぐには動かず、神戸女学院が制服を制定したのは昭和十一年五月であった。戦前期の写真からは、紺地の衿と袖に白線二本のセーラー服で、白のネクタイを結び、左腕にワッペンをつけていたことがわかる⁽⁴⁶⁾。

東北の都市部へと目を転じてミッション系高等女学校における洋式制服化の遅れは目立つ。宮城県立高等女学校では大正十一年に洋服着用を奨励し、同十四年にセーラー服を採用した。これに対して仙台の尚絅女学院では大正十二年に洋服着用を許可していた⁽⁴⁷⁾。ため、制服を制定しなかった。昭和五年に社会の風潮に押されてセーラー服の制服を定め、同九年に衿巾を改正し、衿に三本線を入れた。巾広の

ネクタイは結ばず、梅の花を縫い込んだネクタイ通しに通した。夏服は白で紺の衿と袖に三本の白線を入れ、夏冬ともにスカートの長さはひざ下三、四寸（約九十二センチ）、靴下は黒と決まった⁽⁴⁷⁾。宮城女学校は尚絅女学院よりも一年遅い昭和六年に制服を制定した。同校は尚絅女学院とは違って人気のセーラー服に流れなかった。当時の生徒は「スマートなスーツに赤いネクタイ」と回顧しており、昭和二十年代後半から増えていくブレザー型であったと思われる⁽⁴⁸⁾。

青森県立第一高等女学校では大正十一年にセーラー服を採用していたが、青森県の弘前女学校でそれを制定したのは昭和五年十一月十二日であった。約十年も遅れたのには、青森市と弘前市とで対応に違いのあったことも大きい。大正九年に弘前市学務課は「児童生徒の制服に関する件」という通達を出し、物価騰貴の折柄に父兄の負担となる制服制定は差控えるべきだと指示していた。これを受けて弘前女学校では生徒の華美な姿を放任せざるを得なかった。同校のセーラー服は校長の中川まさご、教師の山崎のぶ、古川たけ、ミス・バイラーが考案した。冬服は紺サージで衿と袖に茶色の二本線、夏服は白ギャバジンで藍色の衿と袖に白線二本を入れた。夏服は半袖用もあり、ネクタイは通常用が臙脂色富士絹、儀式用は薄オレンジ色縹子と使い分けた⁽⁴⁹⁾。

秋田県立高等女学校では大正十二年に洋服着用を

許可し、昭和三年にセーラー服を採用していたが、同県下の聖霊学院高等女学院がセーラー服を制定したのは同六年であった。衿には白線二本と「ちどり模様」が縫われ、昭和十一年か十二年頃には衿を「ちどり模様」から星に変え、十二年か十三年頃から銀のバックルを小さくした徽章を胸につけた。⁽⁵⁰⁾公立高等女学校に比べて洋式制服化が遅れていることがわかる。

北海道の遺愛女学校では和服と洋服の着用を任意とし、和服の場合は元禄袖の綿服を指定していた。しかし、父兄の間から制服を望む声があり、学校側は昭和五年三月に書面で父兄に意見を求めた。「第一条、全校一定の制服を用いる事、第二条、全校洋服を用いる事、但し地質を一定し、型及び色合は各自随意とする事、第三条、従前の通り和服洋服何れにても可とする事」のうち、新入生に導入する意見として第一条が圧倒的に多かった。⁽⁵¹⁾

そこで昭和五年四月に制服を制定し、五月六日の職員会議では、一年生は全員、二年生以上は任意で着ることが決定された。冬服は紺サージで衿と袖口に白線二本、夏服は白リンネルで衿は紺ポプリンというセーラー服。スカートは冬夏兼用の紺サージ、ブルマーは黒縹子、靴下は木綿黒色でバンドの靴下釣りを着用、黒皮靴を履いた。ネクタイは平日用の臙脂色富士絹と、儀式用の白羽二重とに分かれ、冬には紺色フェルト、夏には白ビケの帽子を被った。⁽⁵²⁾

このように全国に点在するミッション系の高等女学校を見ると、公立の高等女学校よりも洋装化が遅く、在校生や父兄から制服化を望む声が出たことがわかる。これは公立の高等女学校が洋装化を主導し、その趣旨を父兄に説明するという構図とも逆転している。裏を返せば、制服を定めなくても着るものがない家庭から通学する女子生徒が多かったといえる。

五 姉妹校の共通性と相違性

ここでは全国に広がる姉妹校を持つミッション系の学校に注目し、その制服の共通性と相違性を考察する。東京のミッション系で洋装化が早かった聖心女子学院は、大正九年（一九二〇）に紺のジャンパースカートを制服とした。⁽⁵³⁾昭和二年にはジャンパースカートにベルトをするように変わったが、依然として着物に袴で通学する者もいたため、昭和九年の卒業式から制服着用が義務づけられた。昭和十一年にはボレロ型の「オーバードラウス」へと変更したが、⁽⁵⁴⁾重くて運動に不向きであり、長くは用いられなかった。⁽⁵⁵⁾大正十二年に開校した兵庫県武庫郡住吉村の住吉聖心女子学院は、同十五年に宝塚へと移り小林聖心女子学院と改称した。生徒たちの制服は開校当初からジャンパースカートであったが、これは姉妹校の聖心女子学院の制服に倣ったものと思われる。

雙葉学園系列は五校あるが、その制服からは面白

い共通性と相違性が浮かび上がる。雙葉では大正十三年の入学生からセーラー服の制服を着た。冬服は紺地で衿と袖に黒線三本、胸当てと衿の左右に赤糸で錨が刺繍された。夏服は白地半袖で衿だけ紺地に白線三本、胸当てと衿の左右に白糸で錨を刺繍し、夏服を長袖にした中間服は袖にも紺地に白線三本がついた。冬夏ともネクタイは黒であった。戦後にはなくなった、冬はビロード（二年後からフェルト）の帽子、夏は麦藁帽子を被った。昭和十年（一九三五）頃にはコートも指定された⁽⁵⁶⁾。

こうした動きに対して不二高等女学校（現在の静岡雙葉）では、静岡県立高等女学校が大正十年四月から改良服を取り入れたものの、メル・セン・フェルナンド校長の方針で洋式制服を採用しなかった。フェルナンドは「本校では校服というものを制定いたしません。其理由は少女時代を一定の制服で決めてしまふことは、審美的に眼をひらき初めた時代のうるほいと美を損失させはせぬかと心配」だと論じ、日本の生活様式は洋服を受け入れる段階には至っていないため「婦人はやはり和服に袴の方がよい」という⁽⁵⁷⁾。

横浜紅蘭女学校（現在の横浜雙葉）は、大正十五年十月十一日にセーラー服を制定し、昭和四年（一九二九）から全生徒が着るようになった⁽⁵⁸⁾。これに対して不二高女ではフェルナンドが学校を去ると昭和二年十月にネクタイのあるジャンパースカートを制

服とした。不二高女では大正十五年の秋に生徒たちに校服が和服から洋服へと変わることの説明があったというから、姉妹校であつても両校で相談や連絡がなされていなかったことがうかがえる。

その点は昭和八年四月に開校した福岡女子商業学校（昭和二十年三月に福岡雙葉高等女学校と改称）からもしっかりする。同校は姉妹校であつたが、福岡県下には福岡女学校や西南女学院などミッション系の私立校があつたため、商業学校としての出発を余儀なくされた。開校当初から紺のボレロ型の上着とジャンパースカートであり、白ブラウスにネクタイやリボンはつけなかった⁽⁵⁹⁾。静岡と福岡ともネクタイの有無などの違いがある。雙葉では東京と横浜のセーラー服と、静岡と福岡のジャンパースカートとに二分した。太平洋戦争後に創設された田園調布雙葉は東京の雙葉に倣ってセーラー服を採用している⁽⁶⁰⁾。

東洋英和の系列の三校からは複雑な関連性が見て取れる。大正末期に東洋英和女学校の高等科に通学した岩出すみ子は、ほとんどが和服で胸高に袴を穿いており、母は市松か矢絰の銘仙しか着せてくれなかったが、綺麗なメリンスを着てくる生徒もいたと回想する。大正十五年六月八日の組受持教師会では「絹地ヲ用ヰザル事、薄キ下着ヲ着スル事」などが決まったが、これも生徒の華美な服装をいかに抑止するかという議論からであつた⁽⁶¹⁾。

校長のミス・ハルミトンは、華美な和服をなくすため洋服を採用することを決心する。大正十五年九月二十八日の教員会では、クリスマスの前に父兄会を開き、来年度から洋式制服を採用することについて相談することが示された。ハルミトンとフランセ洋装店の間では「衿の中、衿元の明き工合、袖付けの工夫」など相談が重ねられた。そして昭和二年から高等科一年と二年にセーラー服を義務づけ、三年生以上は和服の着用を任意とした。昭和四年卒業生が和服着用の最後の年となった。⁽⁶⁴⁾

昭和二年採用のセーラー服は、冬服は紺地の衿・袖・胸当て・左胸ポケットに白線三本、夏服は白半袖で紺の衿に白線三本であった。冬服には臙脂、夏服には青のネクタイをつけた。⁽⁶⁵⁾これはカナダの「C G I T」の制服を模倣したと見られ、当初は後述の静岡英和女学校と大きな差はなかった。しかし、昭和四年には、マリーゴールドの線を冬服の衿・袖・胸ポケットに二本入れ、ネクタイの色をガーネットにあらためた。これらの色はハルミトンの母校であるマウントアリソン大学のスクールカラーであったという。⁽⁶⁶⁾またカナダの国樹である楓に東洋英和のイニシャルの「T・E」を組み込んだ腕章も定めた。⁽⁶⁵⁾

東洋英和女学校の「高等女学科制服規定」の制服図を見ると、上衣が白の吊りスカートであり、スカートのなかには「ブルマース」を穿くこととなっている。この点も静岡英和女学校と同じである。なお、

スカートの長さは床上十二寸（約三十六センチ）であり、「衿あきは咽喉骨より二寸半（筆者註：約七・六センチ）までとして胸当を用ひぬこと」と、胸当てがなくなっている。⁽⁶⁶⁾これがいつ制定された規定かは判然としないが、昭和四年から数年間で細かい決まりとともに変化が生じたのである。

静岡英和女学校の洋装化は体操服から着手された。大正九年十一月二十九日の職員会議で靴使用が決まり、翌十年三月七日の会議では元禄袖にマチの入った袴に統一することとした。六月十七日の会議での「新服装を生徒に試着」二十五日の父兄会での「体操服ニツキ打合」を経て、七月七日に体操服の寸法をとるため洋服店が来校している。この体操服はジャンパースカートであったが、校長のリンゼーはその上にセーラー服を着せることを考えていた。⁽⁶⁷⁾

大正十一年九月十一日の職員会議では「冬服見積リヲ作り父兄ニ相談スル事」が決定され、二十八日には父兄から「何ニても洋服なれハよし。色合も然り」という回答が寄せられたことが示された。十一月六日にリンゼーは「平時も体育の為メ洋服着の方となる旨」を話し、大正十二年三月には四月からなるべく洋服着用にすることが決定した。四月十一日に保護者宛てに配布された印刷物では「体操服（夏外出兼用）」「洋服ノ上衣トブルマース」「白木綿下衣」とあるから、体操服のジャンパースカートの上にセーラーの上衣を組み合わせることに、セーラー

の下にスカートを吊る白木綿のチョッキを組み合わせる事が可能だったことがわかる。

ここで注目すべきはセーラー服を採用した理由だが、同校の場合は父兄や生徒の要望ではなく、一九一五年（大正四年）に教会を中心に組織されたカナダの「CGIT」の制服がセーラー服であったことによる。リンゼーが目指す少女教育は「CGIT」と合致し、また「CGIT」は彼女が会員であるYWCAにも影響を与えていた。静岡英和女学校のセーラー服には、そうした精神を受け継ぐとする意味が含まれているのである。冬服は「ネイビーブルー」のセーラー服の衿と袖口に白線三本がつき、夏服は白だが衿と袖口は「ネイビーブルー」に白線三本をつけた。冬服はカナダの臙脂、夏服は黒の絹ネクタイを使った。⁶⁹

この制服は同校の姉妹校である山梨英和女学校にも影響を与えた。昭和三年一月に夏服は衿と半袖口が「ネイビーブルー」に白線三本で、「ネイビーブルー」のネクタイをつけた白のセーラー服、冬服のセーラー服は「ネイビーブルー」で衿に白線三本、臙脂のネクタイを制服とした。一月に校長に就任したグリーンバンクが同じような制服を制定したのは、三年余りリンゼーのもとで薫陶を受けたからだろう。⁷⁰静岡英和と山梨英和とでは夏服のネクタイの色が異なり、東洋英和が当初の制服を変更したため、両校とは線やネクタイの色に違いが生まれたのである。

白百合の系列は戦前期のミッション系で六校と最大の姉妹校を持つ。仏英和高等女学校が白百合高等女学校と改名するのは昭和十年四月からであり、戦前期において函館は聖保禄高等女学校（昭和十七年に元町高等女学校と改名）、盛岡は東北高等女学校、仙台は仙台高等女学校、湘南は乃木高等女学校、八代は八代技芸女学校から八代実科高等女学校を経て八代成美高等女学校に昇格するなど、白百合と称していなかった。

仏英和では大正十五年十月三十日から紺地で衿と袖と胸当てに白線三本のセーラー服を着せている。ネクタイに二段の白線三本、衿の左右に白百合の花を刺繍しているのが特徴的である。右腕には戦後なくなった袖章をつけた。冬に紺の帽子、夏に麦藁帽子を被ったのは雙葉と似ている。夏服は白地長袖で衿・袖・胸当て・ネクタイだけが冬服と同じであった。⁷¹

八代成美高女は、昭和二年に白衿に開襟のブレザー型の制服を定めた。これに昭和四年までは大黒帽のような帽子を被った。また昭和六年に家政女学校と補習科が増設されたのにもない、紺地で衿・袖・胸当て・ネクタイに白線三本のセーラー服に改正している。さらに昭和十三年の写真では白のネクタイ、左腕に袖章をつけるように変わっている。⁷²

昭和五年に制定した仙台高女の制服は、冬は紺、夏は白のセーラー服で仏英和と似ているが、ネクタ

イは無地であり、衿の左右は白百合ではなく、梅の花を刺繍していた。⁽⁷⁴⁾ 東北高女は、昭和四年に冬服は紺地の丸衿・袖・ネクタイに白線、夏服は同じく白地に紺線の入った制服を制定した。これはフランス人修道女のデザインであり、白百合の制服とは違っていた。

明治十九年（一八八六）に開校した聖保祿女学校は、白百合の姉妹校でもっとも歴史が長い。同校は昭和四年に聖保祿高等女学校へと名称を変更したのを機に、セーラー服を定めた。夏冬とも胸当てに大きな錨が刺繍され、衿が大きいことから「陣羽織」と呼ばれた。当初は夏冬とも白衿であったが、冬服は儀式を除いて紺地の衿を使うようになった。また衿・胸当て・袖に三本線、右腕に袖章をつけた。昭和十四年に冬は紺地、夏は白地で衿・胸当て・袖に三本線、無地のネクタイという一般的なセーラー服へと変更された。⁽⁷⁵⁾ 戦前期の白百合の姉妹校で最後となる昭和十三年に開校した乃木高女は、白百合高女と同じセーラー服だが、胸当ては白百合ではなく白線三本であり、右腕に袖章をつけた。⁽⁷⁶⁾

聖保祿高女は昭和十七年に元町高等女学校、同二十一年に函館白百合高等女学校、同二十三年に函館白百合高等学校と校名を変更した。乃木高女は昭和二十一年に湘南高等女学校、同二十二年に湘南白百合学園高等学校と改名した。昭和二十三年に仙台高女は仙台白百合高等学校、東北高女は盛岡白百合高

等学校、八代成美高女は八代白百合高等学校と改めた。そして昭和二十四年には函嶺白百合高等学校が新設された。

白百合高等学校と同じセーラー服は、函嶺白百合が開校と同時の昭和二十四年、函館白百合と八代白百合が同二十六年、盛岡白百合が同二十九年から着るようになった。仙台白百合では中学で昭和三十年、高校で同三十一年から取り入れている。湘南白百合は確定が難しいが、昭和二十四年の修学旅行の集合写真では胸当てに白百合の刺繍が確認できる。⁽⁷⁷⁾

終戦後に白百合は全国の姉妹校と同じセーラー服を着るようになったが、それまでは各校独自の制服を採用していた。ここからもミッション系高等女学校の制服が統一されていなかったことがわかる。

おわりに

これまで不透明であったミッション系高等女学校の制服について検討したが、紙幅の都合で取り上げられなかった学校を含めると、統計結果ではセーラー服が四十校、ジャンパースカートが四校、ブレザーが一校、セーラー服・ジャンパースカートが一校、ジャンパースカート・ボレロ型が三校、ワンピースが一校、ツープイスが二校、ブレザー型からセーラー服が二校、ワンピースからセーラー服が一校、セーラー服からジャンパースカートが一校、セーラー服からブレザーが一校、ジャンパースカートか

らボレロ型が一枚となる（表参照）。圧倒的にセーラー服の人気の高いことが裏づけられるが、それでもセーラー服に統一されていたわけではなく、デザインもそれぞれ異なっていた。

福岡女学院の記念誌に書かれた多くの学校が模範としたというのは誤りであり、管見の限り各学校の記念誌で福岡女学校をモデルとしたという記述は確認できなかった。むしろ、他校とは異なる斬新なデザインを採用する学校が多く、その制服は公立の高等女学校で同じようなセーラー服が登場するなかで非常に目立つ存在であったといえる。

また今回の調査からは、セーラー服を採用したのが福岡女学校よりも金城女学校のほうが早いことがわかった。これによって長いことセーラー服の起源が福岡女学校だという通説は否定された。今後は同校の影響によってセーラー服が普及していったという見方は変わるかもしれない。ミッション系がセーラー服を採用したのは、金城女学校・福岡女学校・平安女学院が採用したという情報を得たからではなく、大正後期から全国的に高等女学校で洋式の制服や標準服を取り入れる動きに影響されたといえる。実際、福岡・愛知・東京・神奈川・石川の都市部では関東大震災の前から洋式制服を制定したミッション系の高等女学校もあるが、全体的に見ると公立の高等女学校よりも遅れをとっていることがわかる。

採用が遅れた背景には、生徒の個性を尊重するという教育方針があったことによる。しかし、全国的に洋式制服を定める高等女学校が増え、着物に袴という姿は時代遅れと見られるようになった。着物の場合、木綿の筒袖という質素の方針を守るのは難しく、裕福な家庭ではメリンスや銘仙で仕立てた。昭和六年（一九三一）に満州事変が起こり、非常時が意識されるようになると、いつまでも華美な服装を放任するわけにはいかなかった。そうした社会状況の変化に加え、父兄側が生徒の華美な服装を抑止する効果から制服制定を望んだため、ミッション系の学校でも洋式制服に踏み切った。

この流れは学校側の意向で制服制定を図り、場合によって父兄に説明をおこなう公立の高等女学校との違いがあらわれている。このような受け身の姿勢からすると、遅れて登場したミッション系の制服は変わったデザインから人の目を引くことはあっても、高等女学校の洋装化を牽引したわけではなかったといえる。

最後に分析した姉妹校の関係性からも、ミッション系の制服が統一性に欠けていたことがわかる。雙葉ではセーラー服とジャンパースカートとに分かれ、山梨英和は静岡英和の影響を受けたが、東京英和とは衿の線やネクタイの色が違った。ここからは同じ信教の理念を持ちながらも、それぞれが独自に考えた制服を着せていたことがわかる。カトリック系、

聖公会系、プロテスタント系の違いではなく、個人の自由を尊重するというミッション系の寛容な考え方が、国民服のような全体主義による画一的な制服を避けさせたのかもしれない。

ミッション系高等女学校の制服洋装化

表 ミッション系高等女学校の制服

学校名	系統	所在地	制服制定年月	制服の形状
平安女学院	聖	京都府	大正9年11月	セーラー 衿ワンピース
金城女学校	プ	愛知県	大正9年4月	洋服着用
			大正10年9月	セーラー服
聖心女子学院	カ	東京市	大正9年	ジャンパースカート
			昭和11年	ボレロ
フェリス英和女学校	プ	神奈川県	大正10年11月	セーラー服(標準服)
			大正13年6月	セーラー服
福岡女学校	プ	福岡県	大正10年12月	セーラー服
大江高等女学校	プ	熊本県	大正10年	洋服奨励
			大正12年	洋服を制服(セーラー服)
西南女学院	プ	福岡県	大正11年4月	セーラー服
普溜女学校	聖	大阪府	大正11年4月	セーラー服
大阪信愛女学院	カ	大阪府	大正11年4月	セーラー服
			昭和13年4月	セーラー服
北陸女学校	プ	石川県	大正11年	セーラー服
			昭和10年	セーラー服
頌栄女学校	プ	東京市	大正11年4月	ブレザー
			昭和3年4月	セーラー服
静岡英和女学校	プ	静岡県	大正12月4月	セーラー服・ジャンパースカート
松山女学校	プ	愛媛県	大正12年7月	セーラー服
小林聖心女子学院	カ	兵庫県	大正12年	ジャンパースカート
聖母女学院→聖母女学院高等女学校	カ	大阪府	大正12年	ジャンパースカート
日ノ本女学校	プ	兵庫県	大正13年	洋服着用任意
			大正15年	セーラー服
横浜英和女学校	プ	神奈川県	大正13年	ワンピース
			昭和14年	セーラー服
雙葉高等女学校	カ	東京市	大正13年	セーラー服
広島女学院高等女学部	プ	広島県	大正13年	セーラー服
松蔭高等女学校	聖	兵庫県	大正14年	白衿紺地のワンピース
札幌藤高等女学校	カ	北海道	(大正14年)	セーラー服
九州女学院	プ	熊本県	(大正15年4月)	セーラー服
横浜紅蘭女学校	カ	神奈川県	大正15年10月	セーラー服
仏英和高等女学校	カ	東京市	大正15年10月	セーラー服
清心高等女学校	カ	岡山県	<大正14年>	セーラー服
			<昭和10年>	ブレザー
東洋英和女学校	プ	東京市	昭和2年	セーラー服
共立女学校	プ	神奈川県	昭和2年	セーラー服
不二高等女学校	カ	静岡県	昭和2年10月	ジャンパースカート
八代成美高等女学校	カ	熊本県	昭和2年	ブレザー
			昭和6年	セーラー服
山梨英和女学校	プ	山梨県	昭和3年1月	セーラー服
香蘭女学校	聖	東京市	昭和3年3月	ジャンパースカート
梅花女学校	プ	大阪府	昭和3年4月	セーラー服
普連土女学校	プ	東京府→東京市	昭和3年	セーラー服
		昭和12年	ジャンパースカート	
仙台高等女学校	カ	宮城県	昭和3年	セーラー服
同志社女学校	プ	京都府	昭和3年	セーラー服
上林高等女学校	カ	熊本県	昭和4年4月	セーラー服

ミッション系高等女学校の制服洋装化

学校名	系統	所在地	制服制定年月	制服の形状
聖保祿高等女学校	カ	北海道	昭和4年 昭和14年	セーラー服 セーラー服
東北高等女学校	カ	岩手県	昭和4年	白衿紺地のツーピース
遺愛女学校	プ	北海道	昭和5年4月	セーラー服
尚綱女学院	プ	宮城県	昭和5年	セーラー服
弘前女学校	プ	青森県	昭和6年4月	セーラー服
光塩高等女学校	カ	東京府→ 東京市	昭和6年	セーラー服
聖霊学院高等女学院	カ	秋田県	昭和6年	セーラー服
宮城女学校	プ	宮城県	昭和6年	ブレザー
青山学院高等女学部	プ	東京市	昭和7年	セーラー服
北星女学校	プ	北海道	昭和8年4月	セーラー服
福岡女子商業学校	カ	福岡県	(昭和8年4月)	ジャンパースカート・ボレロ
女子聖学院	プ	東京府→ 東京市	昭和8年	セーラー服
捜真女学校	プ	神奈川県	昭和8年	セーラー服
共愛女学校	プ	群馬県	昭和8年	セーラー服
神戸女学院	プ	兵庫県	昭和8年 昭和11年5月	洋服着用 セーラー服
聖名女学校	カ	鹿児島県	(昭和8年4月)	黄色衿黒地のツーピース
女子学院	プ	東京市	昭和9年	セーラー服
純心女学院→長崎純心 高等女学校	カ	長崎県	(昭和10年4月)	ジャンパースカート・ボレロ
活水女学校高等女学部	プ	長崎県	昭和10年5月	セーラー服
清和女学校	プ	高知県	(昭和11年)	ジャンパースカート・ボレロ
乃木高等女学校	カ	神奈川県	(昭和13年)	セーラー服

系統のカはカトリック系、プはプロテスタント系、聖は聖公会系のことである。制定年月の()は開校と同時であること、< >は推定を示す。表は、野間教育研究所所蔵、お茶の水女子大学附属図書館所蔵、筆者が入手した高等学校の記念誌から作成。

註

- (1) 蓮池義治「近代教育史よりみた女学生の服装変遷」四(『神戸学院女子短期大学紀要』一九八六年三月)、桑田直子「一九二〇—三〇年代高等女学校における洋装制服の普及過程」(『日本の教育史学』三九、一九九六年十月)。この点は、拙稿「近代日本の制服研究」(『中央史学』三九、二〇一六年三月)で指摘した。本稿で使用した記念誌は、野間教育研究所とお茶の水女子大学附属図書館で所蔵するものと、筆者が入手したものである。また八代白百合学園の記念誌は八代白百合学園高等学校から提供を受け、湘南・函館・函嶺白百合学園の記念誌は湘南白百合学園中学・高等学校で閲覧させてもらった。
- (2) 『官報』明治三十二年勅令第三二号、同四十年勅令第二八一号。
- (3) 『平安女学院一〇〇年のあゆみ』平安女学院、一九七五年、五七頁、『写真で見える一二五年史』平安女学院、二〇〇〇年、四〇〜四一頁。拙稿「大正時代における高等女学校の洋装化—セーラー服とジャンパースカートの創出過程—」(『中央史学』四〇、二〇一七年三月)参照。
- (4) 『福岡女学院九〇年史』福岡女学院、一九七五年、四〇〜四一頁。
- (5) 『福岡女学院九五年史』福岡女学院、一九八一年、三九頁。
- (6) 『毎日新聞』二〇〇七年十月六日夕刊、『産経新聞』二〇〇七年十月十四日朝刊、『読売新聞』二〇一四年四月十日夕刊。
- (7) 学校制服を研究する難波知子『学校制服の文化史—日本近代における女子生徒服装の変遷—』(創元社、二〇一二年二月)では金城女学校、福岡女学校の制服を紹介し、『近代日本学校制服図録』(創元社、二〇一六年八月)では平安女学院、金城女学校、福岡女学校の制服写真を掲載しているものの、具体的な比較検討をした上でどこが一番早いのかは特定していない。また彼女は『読売新聞』(二〇一四年四月十日夕刊、二〇一六年十月五日朝刊)で平安女学院の制服特集記事でコメントを寄せているものの、セーラー服の起源に異論を唱えていない。大阪府に限定してセーラー服の特徴を分析した、徳山倫子「近代日本における女子学校制服の洋装化とセーラー服の普及過程—大阪府を中心に—」(『風俗史学』六二、二〇一六年三月)でも、平安女学院と福岡女学院のセーラー服を「両者は日本最初のセーラー服の制服として有名である」と、通説に疑問を持っている。
- (8) 『金城学院百年史』金城学院、一九九六年、
- (9)
- (10)

- 二一六頁。
- (11) 『目で見る金城学院の一〇〇年史』金城学院、一九八九年、六一頁。
- (12) 『金城六十年史』金城学院、一九四九年、口絵。拙稿「セーラー服」(『日本生活史辞典』吉川弘文館、二〇一六年、三七五頁)でも、福岡女学院がセーラー服の起源であるとの説を支持していた。
- (13) 前掲『福岡女学院九〇年史』四〇頁。
- (14) 『西南女学院六十年の歩み』西南女学院、一九八二年、二〇頁。
- (15) 同右、二三～二四頁。
- (16) 同右、三〇、五三頁。
- (17) 『愛と誠』の教育―百二十三年の軌跡―熊本フェリス学院高等学校、二〇一一年、四九～五〇頁、一三四頁。
- (18) 『フェリス白菊会の歴史』フェリス白菊会、一九九六年、二五頁。
- (19) 『頌栄女子学院百年史』頌栄女子学院、一九八四年、二五九～二六〇頁、二七一頁。
- (20) 同右、三〇八頁。
- (21) 『松山東雲学園百年史』通史編、松山東雲学園、一九九四年、二七七～二八一頁。
- (22) 『九州女学院の五〇年』九州女学院、一九七六年、四四～四五頁。
- (23) 『北陸学院一〇〇年史』北陸学院、一九九〇年、二一六頁。
- (24) 前掲『北陸学院中学校・高等学校所蔵』(25)。
- (25) 前掲『松蔭女子学院九〇周年記念誌―愛と自由と―』松蔭女子学院、一九八二年、四七、八五、一一八頁。
- (26) 『横浜共立学園二二〇年の歩み』横浜共立学園、一九九一年、一八八頁。
- (27) 前掲『北陸学院一〇〇年史』二七四～二七五頁。
- (28) 『普連土学園百年史』普連土学園、一九八七年、八八～九〇頁。
- (29) 『清和学園一〇〇周年記念史』清和女子中等学校、二〇〇一年、一一頁、一四頁。
- (30) 『大阪信愛女学院九〇年史』一九七四年、三〇、三七頁。
- (31) 拙稿「明治時代の高等女学校と服装論議―女子生徒の着袴―」(『大倉山論集』六四、二〇一八年三月)参照。
- (32) 『梅花学園九十年小史』梅花学園、一九六八年、一〇二頁、一四四頁。
- (33) 『七十年のあゆみ』熊本信愛女学院、一九七二年、二〇、一九一頁。
- (34) 『活水学院百年史』活水学院、一九八〇年、一五〇～一五一頁。
- (35) 『捜真』二四、捜真女学校、一九六七年、四九～五〇頁。

- (40) 同右、一四一頁。
- (41) 『女子学院の歴史』女子学院、一九八五年、四一〇頁。
- (42) (43) 同右、四一二～四一三頁。
- (44) (45) 『神戸女学院百年史』神戸女学院、一九七六年、二六五～二六六頁。
- (46) 同右、二六七頁。
- (47) 『尚綱女学院七十年史』尚綱女学院、一九六二年、一三五～一三六頁。『尚綱女学院創立九〇周年記念帖』尚綱女学院、一九八二年、一四頁。
- (48) 『天にみ栄え―宮城学院の百年―』宮城学院、一九八七年、七六八頁、八六四頁。
- (49) 『弘前学院百年史』弘前学院、一九九〇年、三二〇～三三二頁。
- (50) 『聖霊学園七十年史』聖霊学園、一九七八年、七〇、八五～八六頁。
- (51) (52) 『遺愛七十五周年史』遺愛女子高等学校、一九六〇年、六七～六八頁。
- (53) 『聖心女子学院創立五十年史』聖心女子学院、一九五八年、三八二頁、四一〇～四一二頁、
- (54) 『聖心女子学院七〇年のあゆみ』聖心女子学院、一九七八年、七四～七五頁。
- (54) 前掲『聖心女子学院創立五十年史』九五頁、四一一～四一二頁
- (55) 『小林聖心女子学院五〇年史』小林聖心女子学院、一九七三年、一七頁。
- (56) 『雙葉学園八十年の歩み』雙葉学園、一九八九年、八二頁、八九頁。
- (57) 『創立八十周年記念誌』静岡雙葉学園、一九八三年、一七七頁。
- (58) 『横浜雙葉学園八〇周年記念誌』横浜雙葉学園、一九八〇年、四八、五五、五七頁。
- (59) 前掲『創立八十周年記念誌』一七七～一七八頁、一九五～一九七頁。
- (60) 『創立五〇周年記念誌』福岡雙葉学園、一九八三年、十二頁、二十二頁、三十三頁、五三頁。
- (61) 『東洋英和女学院百年史』東洋英和女学院、一九八四年、二三五～二三六頁。
- (62) 同右、二三六頁。
- (63) 『東光会会報』五、東洋英和女学院、一九六六年十二月、四～五頁、東洋英和女学院史料室所蔵写真(〇二一―〇六二、〇二九―〇〇四)。
- (64) 『カナダ婦人宣教師物語』東洋英和女学院、二〇一〇年、七〇頁、東洋英和女学院史料室所蔵写真(〇〇五―〇八七)。
- (65) 前掲『東洋英和女学院百年史』二三七頁。
- (66) 「高等女学科制服規定」東洋英和女学院史料室所蔵。
- (67) 『静岡英和女学院百年史』静岡英和女学院、一九九〇年、四六四～四六五頁、四六八頁。

- (68) 同右、四六七～四六八頁。
- (69) 同右、四六九～四七七頁、「静岡英和女学院のセーラー服」(『キリスト教学校教育』六六〇、二〇一三年一月、四頁)。
- (70) 同右、四七八頁、『山梨英和一〇〇年』山梨英和学院、一九八九年、五〇頁、五五頁、七一～七二頁。
- (71) 『白百合学園創立百周年記念誌』白百合学園、一九八二年、九四～九五頁。
- (72) 『八代白百合学園創立七五周年記念誌』八代白百合学園高等学校、一九八四年、三〇～三一頁、三七頁、四〇～四二頁、八八頁。
- (73) 仙台白百合学園中学・高等学校の情報提供。
- (74) 『仙台白百合学園歴史資料集』第二編、仙台白百合学園、二〇一四年、五六頁、『広がる愛未来へ―仙台白百合学園一〇〇年のあゆみ―』仙台白百合学園、一九九三年、四九～五〇頁。
- (75) 『百周年記念誌函館白百合学園』函館白百合学園、一九七八年、四〇頁、六六頁。
- (76) 『湘南白百合学園五十周年記念誌』湘南白百合学園、一九八八年、一八頁。
- (77) 『函嶺白百合学園創立五〇周年記念誌』函嶺白百合学園、二〇〇〇年、六〇頁、前掲『百周年記念誌函館白百合学園』六六頁、前掲『八代白百合学園創立七五周年記念誌』五八頁、

『一粒の麦地に落ちて―盛岡白百合学園創立百周年記念誌―』盛岡白百合学園、一九九二年、二四〇～二四二頁、前掲『広がる愛未来へ』五五頁、五七頁、前掲『湘南白百合学園五十周年記念誌』二九頁。

〔付記〕

本稿は、「高等女学校の服装改良問題」(日本大学商学部、平成二十九年個人研究)の成果である。貴重な史料の閲覧および提供をくださった、金城学院、東洋英和女学院、北陸学院中学校・高等学校、湘南白百合学園中学・高等学校、八代白百合学園高等学校、仙台白百合学園中学・高等学校、聖母女学院、藤女子中学校・高等学校、ノートルダム清心学園・清心中学校・清心高等学校、フェリス女学院、広島女学院歴史資料館、小林聖心女子学院小学校・中学校・高等学校、光塩女子学院には、この場をかりて御礼申し上げる。

Abstract

Beginning in the Taisho period, female high school uniforms gained acceptance. Wearing particular apparel has significant meaning female high school students in Japan. At Which school did the sailor uniform originate? What role did Christian school play in Westernization of Japan?

Was the sailor uniform a unified design all over the country? In this article, we studied the female high school female school uniform by examining the school's commemorative magazine.